
赤石の丘のルーシア

光差す海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤石の丘のルーシア

【Nコード】

N3979F

【作者名】

光差す海

【あらすじ】

「赤石の丘のルーシア」はいくつかの冒険アニメやゲームをオマージュした作品です。本当に軽い気持ちで書きましたが、自分では気に入っているのも投稿します。大幅に加筆、訂正してあります。

「赤石の丘のルーシア」はいくつかの冒険アニメやゲームをオマージュした作品です。

本当に軽い気持ちで書きましたが、自分では気に入っているのでも投稿します。

大幅に加筆、訂正してあります。

主要登場人物紹介

ルーシア・・・ルセラ国王女。代々神秘的な力を受け継ぐ血筋。

ルセラ14世・・・ルセラ国王。ルーシアの父。

ラドラ・・・ルセラ国に仕えるせむしの老大臣。ルーシアのお供。

アラモス・・・ルセラ国兵士。大男で怪力。ルーシアの護衛が任務。

ヨゼフィ2世・・・シロエア帝国国王。世界制覇が目標。

カノン・・・シロエア帝国王子。金髪美貌の持ち主。飛行艇の操作に長ける。

邪悪な力・・・5000年前に頭と胴体を別けて封印された魔物
テンブル魔女団・・・邪悪な力を復活させようとする魔女の集団

赤石の丘のルーシア

DC608年、ユストラ大陸の偏狭に位置するルセラ国にある丘、通称「赤石の丘」。

そこに、一人の美しい茶色の髪を気ままな風にそよがせている一人

の少女が

立っている。桃色のワンピースの胸に、鳳凰が羽ばたこうとしている紋章が

書かれている。横には従事と思われる頬のこけた背中曲がった老人と、

目もくらむような巨大な兵士が付き添っている。強い風が絶え間なく吹いている。

「風の動きがおかしいわ。もうずっとよ。ドルガの古文書に在るとおりだわ……。」

「……あの封印が解けそうになっているのじゃ。だがまだまだ早い。どうなっているんじゃ……。」

人の気配を感じ、護衛の大男が回りに目をやった。城の使いが来たらしい。

「ルーシア姫、そろそろ出発です。」少女はこっくりうなずき、老人と大男と共に

赤石の丘を降りていく。「クルス国の情勢はどうなのかしら?」要職についている大臣、

ケセーは答える。「特に政情不安になってはいません。不可思議なのは

大国シロエアの妙な沈黙です。グラスコ調停条約を真面目に守っています、

何か違和感があります。」「……細かな紛争が続いている。人々の心がどこか

ささくれたっている気がするわ。」ルーシアはそこまで言うとき黙った。出来れば、

この外交の旅の終わりに、なんとかシロエア帝国に潜り込みたい。そのように、父である、

国王ルセラ14世に嘆願したのだが、にべなく拒否された。王家の唯一の跡継ぎである

ルーシアにそんな無茶な真似はさせられない、との想いだ、一方、

それをなすべきなのは
王家代々の神秘の力を秘めるルーシアが適任だ、と言うのも理解しているが、親心のほうが
いつも勝ってしまい、代わりに偵察の工作員を送り込んでいるのだが、誰も帰ってこない。

出発だ。ルセラ14世とその一行は、隣国の同盟国、クルスに向かう。お供に先ほどの

せむしの老大臣、ラドラと大男アラモスはルーシア姫の護衛と知恵袋だ。隣国クルスとルセラ国に

隣接しているのがシロエア帝国だ。ユストラ大陸の中央にあるシロエアを囲むように小国が連なる。

小国は隣接国と連携してシロエア帝国の覇権に必死に対抗してきた。今日は両王家の交歓会に

出発するのだ……。ルーシアの膝の鞆には、ドルガの古文書と、真紅に輝く秘宝が入っていた。

国境を通り抜けるルセラ国王一行。太陽の光は淡く、風のみが激しく吹きすさび続ける。

遠く耳鳴りのような音が聞こえるが、それがあたかも大地の嘆きのようで人々の心に不安を与える。

その時、通り過ぎようとする鬱蒼とした森の中から、何発もの銃声が聞こえた。

「なんだっ！シロエア帝国の襲撃か？防げっ！」ケセーが絶叫する。交戦が始まった。しかし、ルセラ14世一行はいかんせん少人数である。

四方八方から襲撃兵は狙撃してくる。次々と倒れる護衛兵士達。

アラモスが一方の森林に飛び込み、自慢の大槍で次々に襲撃兵を切り倒す。

ラドラは煙幕弾を放り、そのまま馬車上のルーシア姫を抱きかかえ元来た道を走った。

せむしの老人とは思えない俊敏さだ。勇敢なルセラ国王は自身剣を振り回し敵兵を

切りまくった。しかし、いかんせん敵は大軍で、しかも四方八方から襲ってくる。迂闊にも

今日の動向をシロエア帝国に察知されてしまっていた。アラモスは血まみれになって、

ルセラ国王を救出に向かったが、その刹那、国王は胸から血を吹いて倒れた。ケセーも倒れた。

アラモスは、大咆哮して数人の敵兵を斬って、ラドラと姫の後を追った。が、追いついた頃には

元来た道からも大量のシロエア兵が接近してきていた。

「くううつ・・・！なんとか、何とか逃げ切らねば！」ラドラは必死に逃げ道を探す。

「囲まれたかつ！うぬうおつ！姫は渡さん！」とアラモスは叫び、前から来るシロエア兵へ向かって

駆けて行く。その時、ルーシアが無我夢中で握り締めていた鞆から赤く輝く石がこぼれ落ちた。

あわてて拾うルーシア。その時！赤石が強烈な真紅の光を放った。

「きやあああああーっ！」

三人は瞬時に意識を失った。三人だけではなかった。あたり一体にいた、全ての人間の意識が失われた。

シロエア兵達も一人残らず気を失い、その場に崩れ落ちた。彼方の大地で、晴天にも関わらず

突如として雷鳴が轟いた。

その頃、ルセラ国内にも、シロエア帝国軍が来襲していた。国王のいぬ間の敵襲に
小国ルセラはとまどった。軍事大臣の指揮で、勇敢に抵抗したが、
彼我の軍事力には
元々大きな差があり、抵抗むなく、わずか半日程度で落城してしまった。

「ルーシア姫はどこにいる？彼女の力が必要なのだ！」と城内を
叫びまわるのは
シロエア帝国王子、カロンだ。金髪の髪をなびかせ、瀟洒な甲冑に
身を包み、

城中をくまなく探したが、見つからない。「ええい、クルスへ向かった陸軍第5先遣隊からは
何の連絡もないし、逃がしたのかもしれない。ならば、必ずここに
帰ってくるはずだ！虱潰しに

城外を探せ！城につながる全ての道を検閲するんだ！」

カロンは見てみたい、とも思っていた。ドルガの古文書に預言を受け
継いでいる一族の、ルセラ王姫を。

封印された禍々しい邪悪の力に対抗する、唯一の力を持ったその姫
の覚醒がなければ、世界は滅びてしまう。

あの邪悪な力を、ゲセマネラ帝国が意のままに操ったりしたら・・・
世界征服は夢になる。必ずルーシア姫の

隠された力を使い、邪悪な力を滅ぼす。そしてその後に世界を・・・
それに、何よりたいそう美しいとの評判だ、

まだ少女らしいが、俺のものにしてみせよう。王子は、ルセラ城の
一番上の塔の窓から、あちこち燃えている

ルセラ国の景色を眺めた。邪悪な力が復活すれば、この程度では済
まない・・・

ふと、ルーシアは目覚めた。どれぐらい気を失っていたんだろう。すぐ横にラドラとアラモスが

まだ気絶している。三人とも森に挟まれた道の真ん中で気を失っていたらしい。揺り動かしても起きない。

右手に、赤石を持っている。まだ淡い光を失っていない。この石の名前は「メーサの赤石」。ルセラ家に

代々伝わる家宝。言い伝えによると、数千年前に邪悪な力が世界を覆ったその時、ルセラの祖先が

この石を使つて邪悪を封印した、と言い伝えられている。

「私にも、やつぱりその力があるのね・・・？」ルーシアは悟った。私自身の使命を。

赤石の丘に行かなくては。あそこにある洞窟の奥の神殿に、石の真の力を解放する場所がある・・・。

ふと見ると、向こうからものすごい勢いで騎馬が駆けってくる。逃げなくては。でも、

ラドラ達を置いていけない・・・。そう遅疑逡巡した刹那、ルーシアは再び気を失った。

シロエア帝国城の地下にある牢屋に、ラドラとアラモスは入れられていた。

「無念じゃ・・・国王は殺され、ルーシア姫はとらわれの身に・・・死んでしまいたい」

「お気を確かに。奴らは姫を殺すことはないでしょう。姫の力を知っているはずです。」

「くうう・・・それを祈るぞ。しかし不甲斐ない・・・トホホ。」カツカツと巡回の兵がやってくる。

「おい！姫は無事か！ルーシア姫に何かあつたら貴様らをブツ殺す

ぞ！」

「そう吠えなさんな、ルーシア姫とやらはご無事だよ。今頃暖かいスープでも飲んでるわい」

「一体貴様らは何を考えている！？何故条約を無視して攻め込んで来たんだ！」

「シロエア帝国の威光を広く世界に知らしめるのさ。世界を制覇するのはこのシロエアだ！」

「狂つとるわい。世界征服などっ……。」「ラドラは舌打ちをした。ルーシア姫の安否が心配で仕方ない。

「私の名はカロン。決してあなたの事を傷つけはしない。どうか心を開いてくれ。」

気がつけば、シロエア王宮の豪華な一室にルーシアは運ばれていた。縛られたりしている

わけではなく自由だった。ただし、メーサの赤石とドルガの古文書の行方は分からない。

取り上げられたらしい。話しかけてくるカロンに対し、ルーシアは目線すらあわせようとしない。

カロンはその横顔を心底美しいと思っていた。必ず自分のものにしてやる、と言う野望が

沸々と沸いてきていた。が、それは隠し、ルーシアを懐柔しはじめた。

「あなたのお父さんの事は申し訳なかった。部下が無茶をしてしまったね。本当は生きたまま

ここに連れて来るつもりだったのだが……。」「

初めてルーシアが彼の目を見た。と言うか睨んだ。激しい敵意と拒否に、カロンはたじろいだ。

その威圧感に言葉を失ったカロンは、「と、とにかく、少しゆっくりして欲しい。落ち着いたら、

また話をしよう。」とだけ言ってさっさと出て行った。

ルーシアは泣いていた。父の死と、これからの運命への不安で。

シロエア帝国のスラー山の深くに、ケルドの洞窟と言うものがある。古の言い伝えによると、

かつて世界を恐怖と絶望のどん底に陥れた邪悪は、頭と体の二つに別れて封印された。

余りの深刻な脅威のため、念を入れて神秘の力を持ったルーシアの祖先が二つに分けて

遠く離れた二つの国に封印した、と伝えられている。それらの経緯はドルガの古文書に書かれている。

邪悪を復活させるのには、この両方を復活させねばならない、と。そして・・・その封印は

5000年後には効力を失い、解かれてしまうのだ。だが、まだその時まで数十年はあるはずなのだが・・・

洞窟の奥の広場のような場所の奥に、途轍もなく深い大穴が口を開けている。見はりの兵士も

いる。カロンはそこから、遙か下にある異形の胴体を見下ろして立っていた。ルーシアも連れて来られていた。

「見ろ、あの禍々しき肉体はどれだけ焼いても焼き尽くせない。あらゆる剣を跳ね返し、

あらゆる類の爆撃に耐えうるのだ。なんと忌まわしい事か！」

地底深く深くに横たわるその巨大な胴体は、人間の数百倍もあるうか。

体は全体的に薄黒く、背に両の翼を持ち、体中から鱗が生え、筋骨は隆々とし、苔の張り付いた

皮膚からすらも悪の瘴気を吐き出している。こうして5000年も

の間、一切活動せずに横たわっている。
全身を一応、気休めにロープで巻きつけてある。が、復活すれば何の意味もあるまい。

「ドルガの古文書によると、口から炎を吐き、目から稲妻を放ち、大きな翼で自在に飛び回り、世界中を焼き尽くし破壊したと言う。」

ルーシアも見るのは生まれて初めてだった。シロエアに潜入したかったのも
これを見たかったからであつた。ルーシアは、赤石の丘に戻るべきだと思つた。

メーサの石の封印を解いておくべきだ。嫌な予感がして仕方ない。

「カロン……。私、ルセラに戻らなくてはいけない。石の力を解放させないと……。」

「ルセラに戻ればいいのか。」「この石の力を解放させる場所があるの。」

「わかつた、すぐにでも行こう。」カロンはルーシアにも、この化け物の恐ろしさが

実感できたのだらうと感じた。誰だつて一目見ただけでわかる。おぞまし過ぎるのだコイツは。

一方、ルーシアは頭の中で、なんとかラドラとアラモスと合流し、シロエアの束縛から
逃げる方法を考えていた……。

シロエア帝国最新鋭の高速飛行艇に乗って、ルーシアとカロンはルセラへ向かつていた。
ルーシアの願いが聞き届けられ、ラドラ、アラモスの二人は牢から

出されて

一緒に行動する事が出来た。また、ドルガの古文書と赤石もルーシアの手に返された。

「これからどうするつもりで・・・姫」コソコソとラドラが聞く。三人は飛行艇の

後ろのほうに位置して座っていた。前の運転席でカノン王子が色々
と指示を出している。

「ともかく、メーサの石の封印は解いておく。そして、悔しいけれど、シロエアと

行動を共にし、邪悪の復活は絶対に阻止する。それから先のこと
は分からない・・・。」

「しかし、本来は復活はまだもう少し先のはずなのに、なぜシロエアは焦ってるんじゃない？」

「わからないわ。ひょっとして、頭のほうに異変があるのかもしれない。風が

騒いでいるのはそのせいかもしれないの。」「頭はゲセマネラ帝国領に封印されているのでしたな・・・。」

「・・・まさかつ、頭のほうに何か異変でも・・・。」とルーシア
が言った時、

ドドゥーン！！と大きな音がした。飛行艇が激しく揺れる。アラモ
スが窓から外を見る。

「敵だつ・・・。噂をすれば、あの紋章はゲセマネラ帝国のものだ
つ！五機ぐらいいるぞ！」

「なんじゃとつ！撃墜するつもりか！姫ッ！パラシュートで脱出じ
やっ！」「うん！」

そこへカロンが走ってきた。「心配するなっ！この飛行船は対空戦
も可能だっ！伏せてろ！」

と言ったん、ドッガン！とまた爆撃された。急激に傾き急降下

していく飛行艇。

「何が対空戦だ、偉そうにつ……」「姫！飛び降りましょうぞ！」
三人はパラシュートを身につけた。

「わわっ、俺も一緒に行くよっ……ひえええっ」と、カノンも慌ててパラシュートを取った。

「あそこの湖を目指すのよっ！」「よし、開けます！一気に飛び出しましょう！」

ルーシアらの乗っていた高速飛行艇はゲセマネラ帝国の戦闘機によつてあつという間に
火達磨になって撃墜されてしまった。燃え上がる飛行艇はルセラ国内に落ちた。

参考資料 周辺の地理

シロエア帝国 ルセラ国

海

↑

ゲセマネラ帝国

境 (ルセラ国の事実上

の空白により空襲可能に)

クルス国

ルーシアらはなんとか湖面に落ち、助かった。三人は岸に上がったが、

カロンだけは頭から落ちたので未だにパラシュートにこんがらがつてもがいている。

「はあっ……邪魔だパラシュートめっ、んが、んおおお」

「どうしよう。」「ラドラは言う。」「無視しましょう。」「アラモスも「ほっときましょう。」「と相槌を打つ。

「でもあの人がいなくてもう一回シロエアに入れなくなっちゃう。」「

「あつ、そうですね・・・。

しょうがねえなこのオタンチンめ。」アラモスが、近くにあった木の棒を差し出す。

こうしてカロンも引き上げられ、ともかくゲセマネラ軍に見つからないように

徒歩で赤石の丘に向かうことにした。幸いメーサの赤石と古文書は共に無事だ。

「なんということだっ・・・シロエア国皇子の俺が徒歩で移動などっ！」カロンがブツブツ言っている。

「嫌ならここで寝てろ。風邪引いて死ぬだけだけどな。」とラドラが相手してやる。

「畜生めえっ・・・。だんだんキャラが崩壊していくっ・・・。」

「それより何故、ゲセマネラ軍が襲撃してきたんだ？心当たりはあるのか？」と、アラモスが問いかけた。ルーシアも知りたい話だ。

「ああ、あるともよ。奴ら、禍々しい邪教の集団を見つけ出しやがったんだ」「どういうことなの・・・。」

「（うはっ 可愛い声だなあ）ペンテルの魔女団という名前らしいが、そいつらは不可思議な魔力を

持っているらしく、頭のほうに日々呪わしい祈りをささげているらしい。」

ラドラは「それはまことかつ！」と慌てた。「それでっ・・・復活が早まっているのね！」

「たぶんそうだろう。それに奴らもきつと君の存在を知っているに違いない。だから命を狙ってきたんだ・・・。」

「なんじゃとお！姫を消しさり、そのペンテルの魔女団の力で邪悪を復活させる気か！？し、しかし、

奴らにもコントロールは出来ないじゃろう！自殺行為じゃないか！」
「ですが、もしも邪悪の力を

コントロールする方法を手に入れているとしたら・・・もしそうなら、ゲセマネラ帝国が世界を

支配してしまう！世界崩壊よりももっと酷い事が起こる！」「急ぎましょう！」4人は歩を早めた。

「そういうことだな。俺らも世界制覇は狙っているが、少なくとも禍々しい邪悪の力を借りようなんて

思っちゃいない・・・あの力だけは復活させてはいけないんだ！」

ルーシアはきつくカノンを睨んだ。

「じゃあなぜ！父を殺したりしたの！そんな事する必要があったの！？」

ルーシアは突如カロンの胸を激しく掴んで揺さぶった。カロンは驚き、何も言えずうつむくしか出来ない。

「どうしてっ、世界を征服だ制覇だの言うの！軍隊の力を使うの！人を殺したの！」

私に普通に言えばいくらでも協力したのにつ！お父さんを返して！」

カロンは、生まれて初めて、人に本気でぶつかられた。こんなに怒った、また、悲しい眼を

向けられた事がない。王子として気ままに振舞い、不自由なく暮らし、本気で怒られたりした事はなかった。

一人の人間に全力で向かい合われて、しかも相手は少女だ。涙が出てきた。

「すまなかった・・・俺達は間違っていたよ、間違っていた。許してくれ・・・。」

陽が落ちそうになってきている。影が長く伸びる。四人は、四人と

もそこに佇む以外なかった・・・。

その頃、シロエア国王、ヨゼフィ2世は、カロンの乗った飛行艇がゲセマネラ軍によって

撃墜された事実を知った。すぐさま、シロエア空軍の全力を挙げて迎撃と救出に

向かうよう命じた。

「・・・いよいよ来たか。胴体には決して近寄らせんぞ・・・。

邪悪だけは復活させん！」

飲んでいたワイングラスを一息に飲むと、部下に地図を持ってこさせた。

「が、総力戦では勝てないだろう・・・。どうしたものか。」思案にふけるヨゼフィ2世。

「伝説のメーサの力なら通常軍などものともしないのだが・・・。伝説が事実なら。」

ドルガの古文書　メーサの力の章より

赤石の力を身に纏いし聖女メーサ、天空を自在に飛び回り赤き光を自在に操り、その光は岩石を切り刻み、破壊し、跡形も無くした邪悪なものと向かい合い、速さ、力強さ、全てにおいて上回った

邪悪なものの放つ攻撃を全て無力化し、その首を切り落とした後頭と胴体と、それぞれケルドとラコリツチに封印されり

封印のさなか、聖女メーサの赤石の力も尽き、聖女メーサは死んだ

聖女メーサは死ぬ間際に、私の力は一族に代々伝えられよう、

遙か5000年の後に、封印の力が消え、また邪悪なるものが復活する

その時こそ我が子孫が聖なる力を使いて、今度こそ完全に邪悪なるものを完全に滅ぼすであろつ、と預言した

赤石は赤石の丘に封印する 約束された呪文を知るもの以外誰にも使えないようにする この力を不要に使うなかれこの力を使いし者の寿命、ひどく縮まれり

G e l h a r s e i m a f h i a l a s s w e l e a
o f f r e d o n e y a r y a r k l e a r

ルセラ国上空で、シロエア空軍とゲセマネラ空軍が激突していたが、ゲセマネラ空軍は少数であったので、シロエアの戦闘機によって、

全機が撃墜された。

それをルーシアら四人は大木の陰に潜んで見ていた。

「大丈夫だ、当面は安全は守られたな。」「急ごつ。幸い、赤石の丘はそう遠くないぞ。」「

「・・・本当に、封印を解くのですか、姫。」「アラムスの問いに、ルーシアはきつぱりと言った。

「迷ってる暇なんてないわ。守らなければいけないもののために戦う。」「

カロン、心底惚れた目でルーシアを見る。突如、ラドラに足を踏まれる。

「おい、おぬし、もしや姫に気があるんじゃないだろうな？わしの目が黒いうちは

姫にちよつとでも触れたら承知せんぞ?」「声が大きいんだよ・
うるさいな。勘違いするな、

それ急ぐぞ!」「ふとカロンが殺気に気づくと、アラモスが上から途
轍もない鬼みみたいな

顔で睨んでいる。「うへえ・・・この恋は命がけかよ。」カロンは
背をすぼめた。

場所は移り、ゲセマネラ帝国のとある祈祷所・・・ペンテルの魔
女団の詰め所。

百人ほどの黒装束の魔女が、死んだ牛と生き血を大仰な祭壇にささ
げ、不気味な祈りを続けている。

「光満つるところ、また影も濃さを増すなり・・・禍々しき神よ、
再びその力を見せたまえ・・・。」

さらに場所は移り、ゲセマネラ国内のラコリツチという、これも
深き洞窟の底深く。

邪悪の頭が封印されている。その目が・・・開こうとしている・・・
。

「ようやつと着いたぞ。あそこが赤石の丘じゃ。」

歩きつめて、既に陽が暮れようとしている。ルーシアはドルガの古
文書を開く。

「秘密の階段は、敷き詰められし石版の紋章の赤き部分に赤石を置
けば開かれる・・・。」

丘の中央に平べったい石版が置かれ、そこにルーシアの服と同じ鳳
凰の絵が書かれている。

「ここね。」石をかざすと、石版が動き出した。「預言のままじゃさ、降りよう。・・・む!？」

遙か東の空から禍々しい雲と妖気が流れてくる。「ここ・・・この邪悪な妖気は一体!？」

「まさか・・・封印が解けようとしているのか?ルーシア!急ごう!もはや希望は君だけだ!」

一行は急いで中に入った。地下は真っ暗だ・・・とアラモスが思った瞬間、ルーシアの持っている赤石が

光り輝き始めた。階段を降りきると、一つの部屋しかなかった。「あそこに大きな石版があるぞ!

姫!あの前で、解放の言葉を言えば封印が解かれるはずじゃ!」ラドラが指差した。

「わかった!みんなは離れてて!」ルーシアはドルガの古文書を開き、解放の言葉を唱え始めた。

l e a G e l h a r s e i m a f h i a l a s s w e
l e a o f f r e d o n e y a r y a r k l e a r . . .

ペンテル魔女団の祈祷所で、ペンテルの魔女団の団長である、グリファスが大喜びしている。

「やった!祈りが通じたぞ!邪悪の王、ディフェールが復活したぞ!妖気で分かる!」

ラコリツチの洞窟の奥深くに眠っていた、邪王ディフェールの両目が開いた!

グオオゴゴオオオツ・・・！！雄叫びを上げたと同時に、黒い波動と共に、

ディフェールの頭が飛んだっ・・・たちまち洞窟の天井を壊し、空高く飛び上がった！

グリファスはさらに呪文を唱えた。「言う事をお聞き。あんたは私たちが復活させてあげたのじゃよ。」

そこへ、報告を受けたゲセマネラの将校達が入ってきた。「邪悪の頭が復活したと！？」

「黙ってお待ち。今呪文でディフェールを支配し、言う事を聞かせようとしているのだから。」

その時、遙か空に浮かんでいたディフェールが祈祷所を覗き込み、両目を光らせた。強烈な

波動がペンテル魔女団の祈祷所で大爆発を起こし、グリファスらは跡形もなく消えた。

「感じたか・・・？」カノンがごくりと唾を飲んでアラモスに聞く。

「わからないわけがあるまい。」

大きく膨れ上がったぞ。「・・・姫、急いでくだされ・・・あなたならあのディフェールに勝てるはず！」

三人は固唾を吞んでルーシアの後姿をひたすら見つめている。

「この世の光を守り、生あるものの明日を約束するために、今こそ我にメーサの力と資格を与えたまえ・・・。」

突如、部屋中を真っ赤な閃光が駆け巡った！ルーシアの手にあったメーサの赤石が、

ルーシアの額にくっついた。ルーシアの体が輝く赤い光に包まれる！ルーシアは聖女の力を手に入れたのだ！

「おおおっ！伝説の通りじゃ！なんという清らかで、しかも力強いオーラじゃ！」

「じゃあつ、私は行くっ！」ルーシアは凄まじい赤い光と共に天井を貫き飛び立った！

「姫よっ！どうか死なないで！」くそっ、ここにいても仕方ない、とにかくここを出るぞっ！」

三人が走って外に出ると、そこには一台の高速飛行艇が待っていた。

「おっ！これは俺の愛艇じゃないか！メガスラッシュ号と言った。

」「イマイチダサイ名前じゃな。」

「うるさい！さ、乗れよお前らも。ルーシアの戦いを見に行かねば

！」「おうっ！」

三人はメガスラッシュ号に乗り込んだ！メガスラッシュ号は急発進した。

邪悪そのもののディフェールの頭の復活と共に、ケルドの洞窟の奥の胴体も復活してしまった。

両者はあつという間にシロエア帝国上空で合体してしまった。5000年の時を超えて

復活してはならないものが復活してしまったのだ。ディフェールの眼が金色に燃えている。

「ウオオガアアアオオオウウウオウイウイウウ！！！」

ディフェールは口から激しい炎を吐き出した。そのまま、地上に吹き付ける！

一つの村があつという間に燃え尽きてしまった。体中から邪惡を撒き散らすディフェール。

さらに他の村、他の街を燃やし尽くすディフェール。と、そこへ！
覚醒した聖女ルーシアが辿り着いた！

「止めなさい！命を奪う事は許さない！今すぐ消えてなくなれ！」

聖女ルーシアは全身を震わせて巨大な波動を放った！ディフェールに直撃した。

「ギャアアアオオウウウウ！！」悲鳴を上げながら突進してくる！聖女ルーシアはひらりと交わした！

交わした勢いで翼を掴み、荒野に叩き付けた！グアドオオオオオン！と凄まじい轟音が響き渡った。

メガスラツシュ号、かなりの距離をとって停泊し、両者の戦いを見守っている。

「す・・・すごすぎる。」「あれが姫なのか・・・！」「行けっ！このまま倒してしまえっ！」

姫の寿命が縮まぬ前に！」「それはどういうことだ？」ラドラは答えた。「聖女になると

寿命が縮むらしいのじゃ・・・。」「そりゃないよっ、死ぬなルーシア！」

かなり弱つたと見えるディフェールは、目を閉じて何かの呪文らしきものを唱え始めた。

聖女ルーシアはそうはさせじと突進する！が、少し遅かった、再び

ディフェールを

殴り倒したのだが、同時に大空に黒い大穴が開いてしまった。

「なんだっあの穴は！」「げえっ！何か出てくるぞ！」「あ・・・悪魔の使いのようだ・・・

しかも数が半端じゃないぞ！」「アラモスは震えを感じた。凄まじい量だ・・・。

大穴から数百と言う数の、黒い羽をまとったコウモリのような魔物が飛び出してきた、一斉に聖女ルーシアに飛び掛っていく！

「消える・・・っ！」

聖女ルーシアは、まばゆく輝く赤い光で、瞬時に全ての魔物の使いを消しさった！

大穴は再び閉じた。そして、返す波動でディフェールの口を破壊した！

「やった！これで奴は呪文が唱えられない！」ラドラは叫んだ。

ディフェールが、今度は黒く禍々しい呪念を高めている！そして一気に強烈な

エネルギー波を放った！ルーシアに炸裂した！空中で大爆発が起くる！

「姫ええっ！」「アラモスが叫ぶ。「まさか・・・。」とカノンもつぶやく。やがて煙が引いていく。

しかしルーシアは平然とそこにいた！そして、ルーシアも力を溜めている！

体中から紅に輝くオーラを発し、それがさらに広がっていく！遠くで見ている

三人にも伝わってくるほどの巨大な力だ！「一気に決めるつもりだ！ものすごい力の集中だ！」

「行け！やってしまえっ！頑張れルーシア姫！」「がんばれ！がんばれ姫！」

聖女ルーシアは渾身の一撃を放った！「ギイッヤアアアアア・・。」

ディフェールは跡形もなく消え去った！

「やったぞーい！姫が勝ったんじゃー！！」「やった！世界は救われたんだ！」

メガスラッシュ号の面々も大喜びである。再び、世界は聖女メーサの力で救われたのだ。

「むっ！待て、あれをつ見ろっ！」空に浮かんでいるルーシアの様子がおかしい。

光が失われ、みるみる消えていく！「まずいつ！力尽きておるんじや！」「てめえらどけっ！」

カノンは全速力で運転室にいき、運転手を押しのけて猛烈にメガスラッシュ号を発信させた！

「待ってるルーシア、必ず俺が救ってやるぞ！！」強烈な加速に、ラドラとアラモスは

転げ周り、周りの柱などに掴まった。「ああ・・・姫が落下し始めたぞお！」

それを見て、メガスラッシュ号も角度を変えて下降しはじめた。下から掬うつもりだ！

「間に合えっ・・・地上に落ちたら姫は絶対に助からん！」ルーシアは既に全ての光を失い、自由落下を始めている。気も失っているのか。「姫・・・神よ救い給え！」と目を閉じて

唱えたアラモスの胸に衝撃が来た。思わず抱きしめ、こわごわ目を開けると、胸には
瞳を閉じたルーシアの体があった。「姫は助かったぞぉーっ！でかしたカノン！」
再び歓喜に湧くメガスラツシュ号。

カノンが駆け上がってきた「どうだ？俺の腕前は？少しは見直したる？」

「少しどころじゃないわい！と、ところで姫の意識は？まさか・・。

」

三人は、一瞬、預言を思い出して息を呑んだ。

その時、ルーシアの目が開いた。

「ありがとう、カノン、アラモス・・・。」

今度こそ本当のハッピーエンドだ！姫を床におろし、抱き合って喜ぶカノンとアラモス。

後にこの二人はライバル関係になるのだが、それはまた別の日のお話。泣いて鼻水を

流して喜ぶラドラ。その顔を見て微笑むルーシアであった。

後、シロエア帝国は改めてルセラ王国の独立を承認し、ルーシアは女王としてルセラ国王の後を継いだ。

依然、シロエア帝国とゲセマネラ帝国のにらみ合いは続くものの、周辺国と協調と和解の

路線に切り替わったシロエア帝国の優位は保たれるようになった。

これはひとえに

改心したカノン王子の進言によるものなのである。その改心した力

ノン王子は

せつせとルーシアにアプローチを仕掛け、そのたびに護衛のアラモスに睨まれているのであった。

メーサの赤石は今はルーシアの胸にぶら下げられ、ドルガの古文書も宮殿奥深くに守られている。

Thank you for
reading!! the end.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3979f/>

赤石の丘のルーシア

2010年12月24日02時20分発行